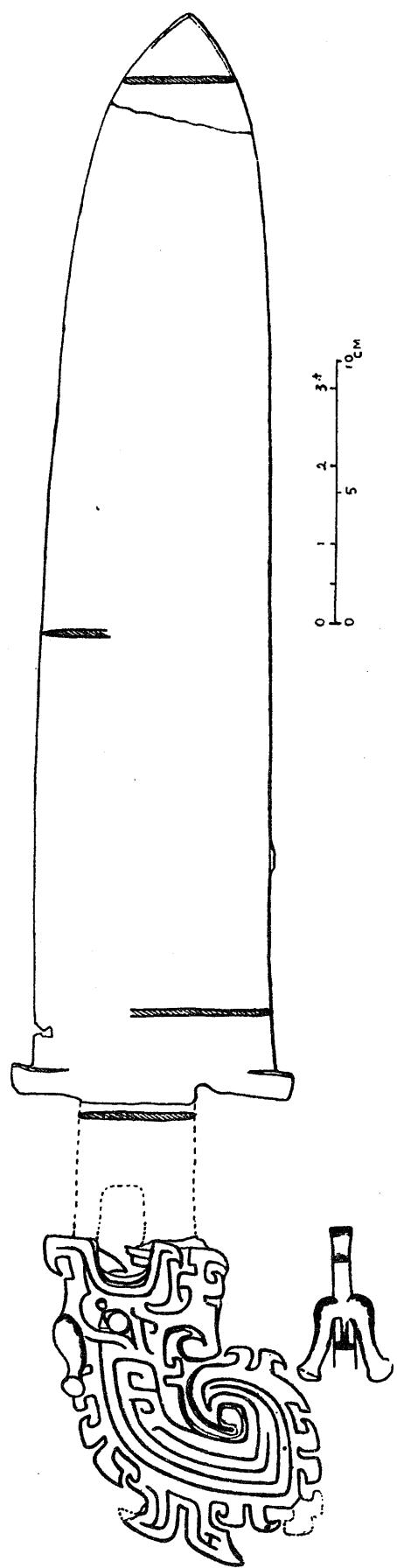


Title	傳殷虛發見の銅製品に就いて：其の實際と形の復原
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.1(509)- 14(522)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:ボストン博物館藏句兵形銅製品測圖
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第三圖 ボストン博物館藏句兵形銅製品測圖



# 史學 第八卷 第四號 昭和四年十二月

## 傳殷虛發見の銅製品に就いて

—其の實際と形の復原—

### 一

支那河南省彰德府（安陽）の附近にある小屯村の一遺跡から出る龜版獸骨の類に刻した文字は、それが古體を示してゐる上に、同地が殷虛と考へられる點などからして學者の注意を惹き、其の銘辭の解讀に對して支那の金石學者が異常の努力を拂つて、關係の多くの論著が發表せられ、それが支那學界近來の顯著な一事象となしてゐるのは世に周知の事實である。處がこれと共に同じ遺跡から出たと云ふ骨角器土器石器其他の遺物が羅振玉氏の本邦に齎したことに依つて、我が一部學者の注意に上り、前者とは別

傳殷虛發見の銅製品に就いて（梅原）

（三九）

な考古學上の見地からそれに考察を加へて、然る後如上の龜版獸骨文と結びつけて遺跡の性質を論じ、進んで支那上代の文化を想察せんとする試みが行はれることになつて、該遺跡に對する學者の關心が一層高められた。

此の後者に屬する資料は最初の蒐集者である羅氏の藏品が夙に「殷虛古器物圖錄」に收めて世に公にせられてゐるし、また其の後の内地への將來品に就いては濱田博士が主に其の紹介の勞をとられて、遺物自體の重要性と學的興味とを説かれた事であつた。處が同種の遺品は單に是等のみには限らないで海外に齎されたものゝ少くないことが既刊の歐米人士の著錄から推測せられると共に、上記のものもそれを通觀すると、遺物それ自らの性質に於いてなほよく究められないでゐるものがある様に見受けられた。後者の例としては所謂白色土器や、羅氏の擧げた銅器片などがそれだと云ふことがある。私は歐米の滯在中、本遺跡に對する學者の注意から刺戟を受け、また自ら支那古代の遺物に興味を持つ關係から機會ある毎に先づ上記の各地に散在した所謂殷虛出土なる遺物の觀察と記録の作成とに從事したのであつたが、其の結果種々の新事實を知り得た外に、上に擧げた銅器片は、其の實物を瑞典のストックホルム (Stockholm) の國立博物館の東洋部で觀ることが出來、更に亞米利加のボストン (Boston) 博物館の同様の收藏品に依つて、器の原形を明確にして、そこに若干の新考察を加ふるの欣びを持つた。でいま此の小編を草して右の概要を錄して同遺跡並に一般支那考古學に興味を持たるゝ人士の参考に供する

ことにした。

## II

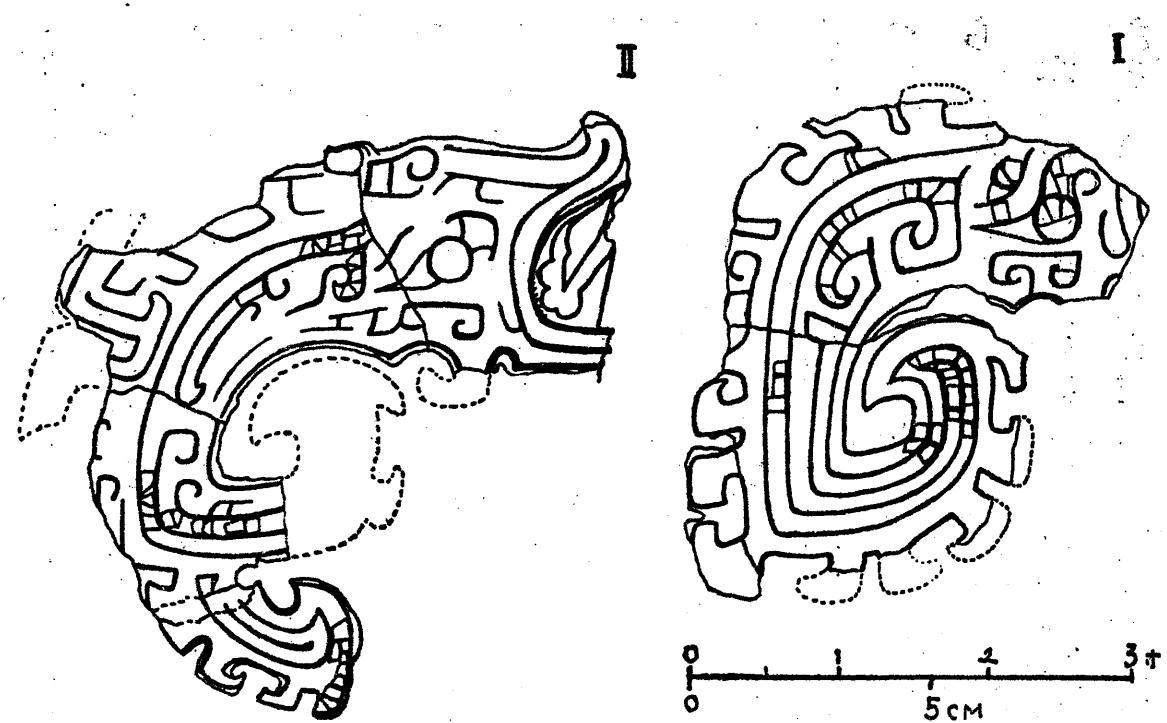
さて右の銅器片は羅振玉氏の圖錄の第十一枚目の中收められて田錄に彝器殘耳と記してあるもので、濱田博士はこれを其の著 *Engraved Ivory and Pottery, found in the Site of the Yin Capital (Memoirs of the Research Department of The Tōyō Bunko. No. 1. 1926)* に轉載して象嵌銅器片と説明せられたもの、従つて割合に廣く世に知られてゐる。さへ是れに就いて羅氏は其の説明に

古彝器斷耳、以銅爲之、花紋至工而嵌以寶石、綠如翠石、不知爲何物

と記してゐるのみで詳しい解説がなじから、單に寫眞に表はれた處で、器片上饗饗或は虺龍と見る可き一種の怪獸形が、可なりの突線で鑄出されて、其の線間に象嵌を施したものなのを知り得る以外、それが果して扁平なものであるが、或は彎曲を示した器の一部分であるかは明でなく、本來の器形や性質などは全く究められないでゐた。あと羅氏の殷虛採集の古器物は、明治の末年に京都に齋されて、上記の圖錄が大正のはじめに印行せられたのであるが、其の際私は内藤博士の厚意で羅氏の許に出入して、幸に遺品の殆んど全部を觀るの機會を持ち、其の或物は氏から手拓測定するの便をも與へられた。で本銅器片の如きも當然見たのであらうが、それが何分知見の乏しかつた大正三四年の頃の事なので、後か

ら顧みるとすべてが驩氣で、これに對するはつきりとした記憶がのこつてゐない。其の後殷虛出土品の主なものは羅氏が再び支那に帶歸せられたのであるから、同遺跡の事が世の注意を惹くにつけ、自餘の興味ある遺品と共に此の銅器片を天津の羅氏の許で觀るの喜びを得たい事を私は念じてゐた。處が歐洲に遊んだ年の冬、ゆくりなくも巴里の Wanneck 氏の許に同じ式の遺品のあるのを觀た私は、それが羅氏の舊藏品ではないかを疑つたが、翌年の秋轉じて北歐ストックホルムの博物館で遂に原物に接するの豫期せない幸慶を得た。而して Andersson 教授の説明に依つて羅氏が他の多數の傳殷虛出土品と共にこれを同博物館東洋部に譲渡した事實を確めた上、遺物の細部に亘る測定なり觀察をなし得たのであつた。

右の結果に基くに此の傳殷虛の銅器片と云ふのは二つの大きな破片と小破片一個とから成り立つてゐるものであつて、前二者は幸にもそれを接合して一つの器形に復することが出来る。いま此の接合したものに依つて形狀を觀るに、表はす處は上記の如く尾部を曲げた一個の饕餮ともまた虺龍とも解せらる一種奇異な獸形であつて、其の周縁の破片から一見大きな器の飾り文の一部分をなすものかとも思はれるが、仔細に檢すると處々に本來の器縁を示す部分を遺存して、型の合せ目の痕すら認められる。で獸形の頭部にやゝ著しい缺損部を見る外では體軀其他の主要部がほゞ原形をとどめて、これが本來とあまり違はない一つの獨立した形なのが知られる。而して此の器上の獸形は扁平な厚手の銅板の上に鑄表はされてゐて、形の各部は極めて高い突線から成り立ち表裏全く同文である處から、それが他の物質には



圖測の「内」の器兵句の個二

圖二第

め込まれたものでない事も明である。第二圖の一は其の形狀の測圖であつて、周縁に若干の復原を試みて置いた。いまこれを羅氏の圖錄載する處の寫眞と對比するに兩者が同一品である事は一見明瞭であるが、同時に寫眞に比して本圖の方が缺損部のやゝ多きを加へてゐる事も知られやう。

此の器で以上の外形と共に舉ぐ可き他の重要な點は獸形の細部を表はす突線間の青石の象嵌の、原形の儘なる一部分の遺存である。其の手法は下部に一種の漆喰様の白灰色の膠着材をうづめて、其の表面に極めて薄くはいだ小さな青石をモザイク状に張ると云ふ、進んだ方法に據つて居り、青石の表面はいままほ美しい光澤を持つてゐる。此の象嵌は脱落し去つた部分の多いのは云ふまでもないが、殘存部が幸に修補されないで、もとのまゝであるから、離脱部を通じて如上の手法のはつきりと知ら

れる點が特記に値するのである。

上記の傳殷虛發見片に比すると、それより前に巴里で觀たワニヤック氏の所藏品は出土地の傳へがなく、同じく破碎はしてゐるが、形が大きくて、虺龍とも見る可き怪獸の全體の形のほど窺はれる點で興味が多く、前者は本例を俟つて、はじめて頭部の正しい形を推測し得るに近い。これまた同じく扁平な板狀の鑄物であつて、其の現存部は第一圖の二の寫眞に見る如く、一種の怪獸形をなして、その細部を表はす各線が高い突起線から成り、線間に青石トルクワーズを嵌入する處の手法は前者と全く軌を一にしてゐる。

而して實物に就いて詳しい觀察を加へ本來の形を求めるに第二圖の二に示すものとなつて、現存部自體の原形に近い事が確められ、表はされてゐる怪獸は口を開いてゐて、其の上下にある大きい牙が著しく目立ち、また體軀に比して大きな頭部の上邊にもと突起した雙角の存在を推し得るなど上半部の特徴が充分認められるのみならず、下半部また一部を缺失し乍らも尾部の二分してゐる點が明に看取せられる。本遺品では其の象嵌の青石が一見餘程よく遺存した様であるが、實は大半脱落したものと後に新たに補つてあつて、本來のまゝと覺しきものは數個に過ぎず、下半部の如きは修補の痕が寫眞でも容易に認められる位である。

本例の示す獸形は其の細部に於いて前者と同じくない處がある。體軀のやゝ細長い點の如きは其一である。然しこれから破損の程度の相當に大きい前者が本來の何れの部分に當るかを明確にすることが出

来る。而してまだこれに示された獸形が古銅器文に似てゐると共に他方其の外形の近時支那で多數に見出される古玉中の小さな獸飾りの或者と同じ事も注意に上るのである。(參照 Paul Pelliot; Jades Archéologiques de Chine Paris, 1925. 及び Barthold Laufer; Archaic Chinese Jades. New York, 1927)

### III

以上の二に對して最近ボストン博物館の有に歸した一例は其の保存状態の良好な點で第一位を占むるのみならず、初にも一言した如く器の全形を復原するに役立つ一個の利器の身部の竝び遺存する點に於いて重要な資料なのである。じま先づ其の獸形の部分に就いて見るに、これは第一圖の三に見る如く前二者と同じ製作を示して扁平な銅板の兩面に「ニ」字形に近い怪獸の形が鑄出され、それが極く一小部分の缺失と、一ヶ所の破損接合部とを除くと大體は本來の形の儘で、縁の工合がはつきりと見られる上に、象嵌は脱離の部分が多いが、前者の様な出土後の修墳がなくて、突線間に象嵌するに、第一に漆喰様の物質を填め其の表面に薄い青石を置いた、上記の傳殷虛出土品と全く等しい象嵌の技巧の明に認められるのが有益である。また形の上でも怪獸の頭部の形が明瞭であつて、肉を持つた一種槌様の雙角の平板な面から造り出されてゐるのが原形を存して、圖形全體がワニヤック氏の遺品よりも傳殷虛出土品に近く、恰も彼の破片を復原する際得る様な形を示してゐる事を記すべきである。而して周縁に破損

の少ない本例に於いて、はじめて此の獸形銅器が開口した怪獸の兩唇の部分からして、本來他の器形に連なつた形迹を認め得るのである。(第三圖参照)

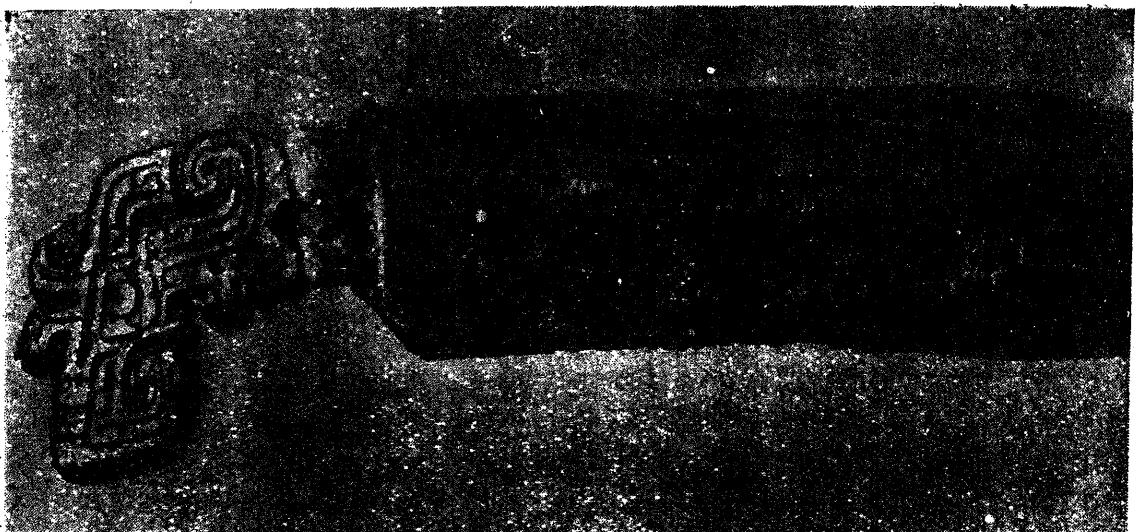
次に右の部分と共に存する銅製品は第三圖に示す様な偏平な劍の形をしたもので、もと先端近い部分で折れて二片となつて出土したのを接合の上いま全い形を示してゐる。それは長さ一尺一寸餘に對して三寸に近い幅の寧ろ珍らしい形である。而して此の劍身にあつては多くの利器に認められる如き中央に鎬や峯がなく、通じて一樣の厚さから成つて、それが六七厘と云ふ薄いもので、兩縁に刃に對する加工の痕が殆んどないのみならず先端部がかへつて厚いかとすら思はれる位である。その點からすると本遺品は我が廣鋒銅鉢や平型銅劍の身と同じ特徴を持つてゐるものと云ふてよく、幅の廣いこと、相俟つて、利器の外形を示してはゐるが既に實用を離れた類なのが頗る明瞭なのである。此の身の本即ち關部には兩側に柄を受ける爲の小突起が出て、次に所謂莖とも云ふべき部分に續いたのを示すが、現在では其の處で切斷せられて、同部を缺失、同部の幅の一寸五分などを知り得るに過ぎず、本來の長さなどは全く不明である。

此の兩者は一兩年前ボストン山中商會の中川金正氏が北平に於いて一括して獲たものと云ふが(發見地の傳へなし)、いま後者の劍身を既記の怪獸形と對比すると、其の間に鑄上りや技巧の上に可なり著しい違ひが認められる。即ち前者は銳利な突線で、巧みに獸形を鏽出して象嵌さへ加へてゐるに對し、後

者は大形乍ら頗る形式化し、殆んど鑄放しの儘の如く見ゆる點が  
それである。従つて卒然として兩者を觀るとそれが互に同一の器  
の部分をなすものとは一寸考へ難いのであるが、他方兩者に見ゆ  
る銅鑄が銅質と共に大體一致してゐる上に、既記の怪獸の兩脣の  
間に遺る折斷缺失した部分の幅が丁度他の所謂莖部の幅と一致す  
ることが、兩者を結びつける重要な楔子となるのであって、これ  
からもと一つの器であつた事が認識せられる。いま兩者の間に若  
干の缺失部を補填して復原せむか、そこ心得るところの形は實に  
第三圖に外ならぬのである。

さて此の復原形を得てから、それより前に歐米の蒐集品で見た  
支那の利器類を顧みると、うちに小形乍ら同じ式の利器のあつた  
事が氣付かれるのである。第四圖は其の一例でもとワニヤツク氏

の手にあつたもの、本器の怪獸飾りは固より簡単で上來記した大  
形精巧な象嵌品に比す可くもないが、兩者の形式上の一一致は極め  
て顯著であつて、こゝにまた上記の復原形の認容せらるべき一證



第四圖 出那支藏舊氏クツヤニワ

左を見出すわけである。かくて出土後單に異様な銅器片として取扱はれて來た傳殷虛出土の象嵌ある片は第四圖とほゞ等しい支那人の所謂矛——實は西人の halbert 卽ち戈の類の一  
種の「内」<sup>ナイ</sup>の飾りの部分であることが、實物の比較研究から確められたのである。私はこの歸結に達して、嚮にストックホルムで該遺品を調査してゐた際、アンダーソン教授が、「内」の部分に饕餮樣の簡單なる飾りのある戈の類を示して、殷虛の遺品も亦同じ類であるかも知れぬと話されたことを思ひ浮べ、教授の明敏に服すると共に自らそれを實證し得た事を欣ぶ次第である。

## 四

以上殷虛發見の銅器片のもとの形が明となつたに就いて先づ攷ふ可きは、其の器の性質である。いまそれを全形の明なボストン博物館の藏品に就いて見るに一種の利器の形を探つてゐることに何等の疑はないが、其の示す形は身と怪獸形の飾りの間の部分を握るところの刺兵の器たる短劍の類ではなくて、この部に柄を着けた式であることが想察せられるのである。而して此の柄の着裝は劍身と直角に交る位置に於てなされて、一方關にある突起に添ひ、他方怪獸の口部につゞいて開かれた孔の間にあつて、兩者が相俟つて器に柄を結縛するの用をなした事が察せられる。此の點からすると本器は支那の漢以前の利器として顯著な戈と相似た柄の着裝を示すものと云つてよく、従つて器の用途も彼と同じく本來句兵

であつた事が認められるのである。果して然らば前後に一寸附記した如く、傳殷虛出土の銅器片はまさに周禮の「考工記」の戈の條に「内」<sup>ナイ</sup>とある部分に相當つて、それが擴大され純然たる裝飾の性質のもとなつたに外ならぬ。而して吾々がこゝに本器に柄を着裝した形を復原すると、それは先秦の古銅器の銘に往々見る處の、戈と讀まれてゐる象形文字の簡単な形に酷似したものが得られて興味を惹くのである。但し此の際注意を要するのは、本器の外形が右の如く一種の匁兵の形を持つてはゐるが、同時にそれは最早先秦に多い戈の如き實用の利器としての特質を備へてゐない事はれである。既記の如く其の身部は扁平な部分から成つて、刃部がなく其の幅の廣大した點は利器としての機能から著しく遠ざかつたものであると共に、上記の「内」<sup>ナイ</sup>の怪獸形の飾りの工合また實用の器に見るのはかけ離れたのを思はしめる。で示された器は本來の利器が其の發達につれて漸次形式上の分派を生ずると共に、再轉して本來とは違つた意味のものとして作られた類と解せられる。而して其の示す意味に就いては、もとより利器の形をとつてゐる點から權威の表徴<sup>シンボル</sup>として作られたとする解釋が可能であると共に、他方別個な宗教的な意味を持つたものと見るの推測も加へられるのであつて、此の後者は上引宗廟の什器と云はる。先秦の銅器文に同じ圖形の象形文字の表はされてゐる點と共に考慮のうちに入つて來るわけである。

上に記した諸例が大體かくの如き性質であつて而も其の一つが所謂殷虛から出土してゐるとなるとそれから更に種々の新しい考察が加へられ得る。先づ第一に既に此の如き實用を離れた器形の發生は理論

上どうしても實用たる利器の發達の後に來るべきものでなければならぬから、そこに當然考へられるのは支那に於ける同種の利器發展の過程の存在の想定であつて、それに對する實物に測した形式學的研究が考古學上重要な意義を持つ。處が此の支那にあつては從來古代銅器の研究が銅容器に局限せられ、而もそれも器にある銘辭の解讀を主として、文化の推移上最も重要な役目をつとめる利器に對する學問上の考察が殆んど顧みられず、銘辭の體から直ちに時代の決定を見ると云ふ風に墮して現在なほ利器に對する據るべき先人の業績に乏しい。たゞ歐米の人士で支那の遺物に興味を持つものには、流石に彼地に於ける一般考古學に關する基礎知識の普及からして、近頃同種の利器の蒐集に意を用ひてゐるものを見受けるのであつて、私は在外中其の恩恵に浴し可なり豊富な利器の類を見る幸を得て、是等の整理配列から如上の分野に若干の開拓の歩を進め得るの希望を抱くに至つた。尤も吾々の現在有する知見からは、依然として銅容器の場合に於けると同じく、利器としての原始的な形を持つ遺品の乏しきを託つ次第であり、なほ通じて古い時代に整美な式の多いらしく推測せらるゝ點などがあつて、問題を難解に導く傾向を示してはゐるが、然しそれと同時にまた或程度の資料が備はつて上記の如き形にまで句兵の類の進展するの序列と他方其の退化型に至つては必ずしもトレースするに難くはない様である。しかしながらの如き試みの下に得た形式の序列から上記の傳殷虛の遺品を顧みると、あの進んだ式を以て單に殷虛から出たと云ふのみで直ちに殷代の遺品と解するには首肯し兼ねる點が多いのである。最近に至つて

右の殷虛は亞米利加のフリヤ美術館の援助の下に支那の中央研究院歴史言語研究所の考古部員の手で一部の發掘が行はれたが、從來は何等遺跡に就いての學術的調査がなかつたのであるから、よし同地が殷虛であると云ふ羅氏はじめ多くの學者の考證が當つて居り、また龜版獸骨類の銘辭が其の體及び意味から同代のものと推定せられても、殷代以後同地に住民がなかつたとの積極的な證左が出ない以上は、層序の關係の明でない、其の出土品を擧げて悉く殷代のものとする事の不可能なのは自明の理である。これを實物の示す上に就いて觀るも、傳殷虛出土と云ふ石庖丁や磨石斧の類は寧ろ原始的なものであつてこゝに復原した匂兵から出た一種の儀器たる銅製品との間には著しい技巧上乃至製作の心理上に相違がある事が認められるのであるし、其の青石象嵌の手法の如きに至つては漢代に盛行した帶鉤のそれとの一致を認めしめるから、兩者が同時に殷代に存して、そこに文化の過渡期を示す如く解する事の困難なのが認められやう。同じ事はまた所謂白色土器片に於いて其の器形を復原し、細部を觀察してそれを如上の石器類と比較するときにも云ひ得るのである。所謂殷虛の持つ重要な意義を解する點に於いて私は人に譲らないつもりであるが、單に現存の資料からして——而もそれも資料の持つ性質を究めることなしに、是等に依つて支那の文化の曙光が明にせられるが如く解するの見は大いに考慮を要するものなのを、本小銅器片の復原から切に感ずる次第である。こゝに至つて吾々は近き將來に續行せられる中央研究院歴史言語研究所の發掘作業が好果を收めて多くの疑問を解決するの曙光を與へて呉れることを念ずると

共に、既に與へられてゐる資料に精密な考察を加へて一々性質を究め、所謂殷墟のうち破壊せられた部分の復原を形式學上からする考察の意義のあることを思ふのである。

結末に當つて以上記した遺品の調査に便宜を與へられたアンダーソン教授、富田幸次郎、ワニヤツク爾氏に感謝の意を表したい。(八月廿一日稿)

梅 原 末 治